

自己呈示としての丁寧さ

－「女ことば」の可能性－

横倉 真弥 (岐阜協立大学経営学部)

キーワード：自己呈示、丁寧さ、他者からの承認、女ことば、配慮表現

1. はじめに

人は他者との関係の中で、絶えず自分が他者から見られたい、あるいはそう見られることが当然であるという「自己イメージ」と、他者が自分をどう見ているのかという「他者からのイメージ」を重ね合わせ、交換し合い、コミュニケーションを行っている。この「自己イメージ」や「他者からのイメージ」を表現する記号あるいは装置として、服装・しぐさ・髪型・化粧などがあるが、なかでもコミュニケーションが行われる場や人間関係にふさわしい言葉の使用の有無が「自己イメージ」を決定づけることが多くみられる。敬語をはじめとする配慮表現の使用は、一般的に「丁寧」な印象を与えるものであり、この「丁寧」なイメージが「常識」「教養」「品格」などのイメージを派生させてもいるだけに、正確な使用の有無は「自己イメージ」や「他者からのイメージ」の表現に密接に結びついているなどは、その一例であろう。言うまでもなく、表情・しぐさや動作などが時として決定的な意味を持つ場合もあり、いつでもどこでも言葉だけが唯一の決定要因になるとはかぎらない。

このように「自己イメージ」は自己だけで作られているのではなく、そこには「他者からのイメージ」が介在しており、ゴッフマン (2002) は、こうしたすでに他者によってつくられた、あるいは期待された「自己」に関するイメージや期待を内面化して「自己イメージ」が出来上がっている点を指摘した。そして、こうした期待に反する言動をする場合、非難を込めた眼差し・無視・仲間外れをはじめとした様々な社会的制裁がなされることになるのである。しかしながら、その一方でこうした他者によって作られた「自己イメージ」に違和感、居心地の悪さ、葛藤を感じて、それを表したり、あるいはそうでない場合でも「自分らしさ」を表現したりする根源的な欲求が人間にはあるだろう。

この「自己呈示」の欲求がコミュニケーション行為、特に他者への配慮表現との関係の中で、どのように表れ、意味を持つのかを問題にしたのが滝浦 (2022) である。Brown&Levinson (1978) のポライトネス理論では、コミュニケーション相手の「面子 (フェイス)」を失わせる言語行為の回避、あるいはそれに対する補償行為 (ポライトネス) を主題にして構築されているため、他者への配慮が中心となって「自己呈示」は直接の考察対象となっていないからである。ポライトネス理論で「自己呈示」が鮮明に登場する場面は相手のメッセージに対する「訂正」であるが、その場合ですら「自己呈示」が「フェイスリスク」の最も高い行為と関連しているからである。したがって、この行為をいかに回避、あるいは緩和するかに主題は絞られて、「自己イメージ」の中に内面化している「他者からのイメージ」と「自己呈示」の関係そのものは考察の対象からは外れる。

言うまでもなく、「自己呈示」は他者からの承認を必要とし、この承認がなければ「自己呈示」は独りよ

がりのものになるだろう。そして、それを回避するためには承認を与える他者への配慮も必要となるだろう。それゆえ、この「自己呈示」とそれに承認を与える他者への配慮という問題はポライトネス理論の欠陥点を突くだけでなく、コミュニケーション固有の問題であると考えられる。それと同時に、この問題は従来の「自己イメージ」や「他者からのイメージ」が揺らぎ変化している時代や社会においては、個々の人にとってはより切実な問題となっていると思われる。本稿では、こうした視点から「女ことば」のうちにみられる他者への配慮表現と「自己呈示」の関係の在り方、その可能性を考察してゆくことにしたい。「女ことば」にはこうした問題が凝縮されてみられるからである。

2. 「丁寧さ」と「女ことば」

2.1 「敬語使用」にみられる女性像 ―若年層の場合―

はじめに、横倉 (2024) が、岐阜協立大学学生 (男性 265 名、女性 35 名、計 300 名 調査期間: 2023 年 5 月 13 日～22 日) を対象として行った敬語に関する意識調査のうちから、敬語使用を通じて見られる「女性」像について紹介しておこう。

アンケート調査の質問内容は、①敬語が上手に話せる社会人男性/女性にどのような印象を抱くか、②敬語が上手に話せない社会人男性/女性にどのような印象を抱くか、③敬語を使うことで相手にどのような自分だと思われたいか、である。これらの質問について、①③の場合は「丁寧である、気配りができる、やさしい、上品、教養がある、常識がある、有能である、コミュニケーション能力が高い、信頼できる、きちんとしている、つめたい、よそよそしい」、②の場合は「失礼である、気配りができない、乱暴・がさつ、下品、教養がない、常識がない、有能でない、コミュニケーション能力が低い、信頼できない、きちんとしていない、情に厚い、親しみがある」の選択肢の中から、それぞれ該当するものを 3 つずつ選ぶという方法をとった。なお、これら回答は男女別統計 (%) をもって分析しているが、対象とした学部学生の男女別構成の特徴上、性別に偏りがあることをお断りしておく。

調査結果から、以下の点を指摘できる。

まず、男子学生が敬語スキルのある社会人男性に対して抱く印象は「丁寧である (66.8%)」「常識がある (59.2%)」「きちんとしている (37%)」が上位 3 つに、そして敬語スキルのない社会人男性に対して抱く印象は、「常識がない (54%)」「失礼である (52.1%)」「きちんとしていない (35.8)」が上位 3 つとなり、敬語が上手に使える場合の印象とベクトルが逆になっている。これに対して、女子学生が敬語スキルのある社会人男性に抱く印象は、「常識がある (62.9%)」「丁寧である (57.1%)」「きちんとしている (31.4%)」となっており、敬語スキルのない社会人男性に対して抱く印象は、「常識がない (57.1%)」「失礼である (40%)」「きちんとしていない (37.1%)」となった。この結果から、敬語スキルのある、あるいはない社会人男性に抱く印象は、多少の順位の差異はあれ、男女ともほぼ一致していることがわかる。また、男子学生は敬語を使うことによって相手から見られたい自分については「常識がある (64.5%)」「丁寧である (51.3%)」「信頼できる (40.8%)」が上位 3 つとなっており、敬語スキルのある社会人男性に抱く印象とほぼ一致していることがわかる。

次に、男子学生が敬語スキルのある社会人女性に対して抱く印象は、「丁寧である (60.8%)」「上品である (47.5%)」「常識がある (43.8%)」の 3 つが上位にランクしており、敬語スキルのない社会人女性について抱く印象は「常識がない (50.9%)」「失礼である (49.1%)」「きちんとしていない (33.9%)」が上位 3 つである。これに対して、女子学生が敬語スキルのある社会人女性に抱く印象は「上品である (68.6%)」「丁寧である (48.6%)」「常識がある (40.0%)」となっており、また敬語スキルのない社会人女性に抱く

印象は「常識がない」「失礼である」が同率（45.7%）1位、そして3位が「きちんとしていない（40%）」となっている。先ほどの敬語スキルのある社会人男性に対する印象と異なるのは、「上品である」が上位にランクしている点である。そして、女子学生が敬語を使うことによって相手から見られたい自分は「常識がある60%」「丁寧である（42.9%）」「信頼できる（40%）」となっている。この点は、男子学生と一致しているものの、敬語を使うことで「上品」とみられたい女子学生も31.4%おり、「上品」と見られたい男子学生（14%）のおよそ2倍の割合となっている。

以上の結果から、大学生にとって「敬語」は、「常識」「丁寧さ」「きちんとしている（信頼）」といったイメージを想起させるものであり、これをうまく使いこなすことと「社会人」が、そして「社会人」と「常識人」とが根底で結びついていることがうかがえるだろう。しかしながら同時に、「敬語」が上手に使えることの印象では、その使用者が女性であると「上品」という印象が加味される点に男女の意識差が現れていることも明らかであろう。敬語スキルのある社会人女性に対する印象では、男子/女子を問わず「上品」が上位にランクしているが、女子では男子を上回って69%が選択しているからである。そして女子学生のおよそ31%が、敬語を使うことによって自分は「上品」だと思われたいと回答している。このことから「敬語」の「上品」性は、相手に対しても、自己に対しても、「女性」という「社会的属性」と強く結びついており、女子の言語行動の規範になっていることが指摘できよう。

東海地方都市の大学生という地域の特徴が反映されている可能性はあるが、令和の大学生においても「丁寧さ」から派生する「上品」という印象は、主に女性に偏って結びつく傾向にあること、そして女子の言語行動の規範となっており、女子の方がこの規範性を強く感じ、実行しようとしていることを以上の調査結果からは見てとることができよう。一方、調査対象となった学生は、そもそも男女比率が大きく偏る大学に属する学生たちであることから、女子学生が男子学生の「異性」性を意識して、そのような規範意識を示して見せたという可能性がある。内田（1997）、メイナード（1997）などが示しているように、女性も男性も、同性同士で話すときよりも異性と話すときのほうが、より「女性らしく」あるいは「男性らしく」ふるまう、あるいは「女ことば」「男ことば」を使用する傾向にある。すなわち、このアンケートが行われた環境自体が、少数者である女子学生に「男性」を意識させ、規範に準じた「女性らしい」選択をさせた可能性があるのである。

この「選択」が「規範」からくる無意識の強制力によるものなのか、「異性」を意識した一種の演技的なものなのかは判然としないが、「異性」を前にアイデンティティとしての自分の「性」を呈示して見せるということは、コミュニケーション上よくあることであると考えられる。すなわち、自らのアイデンティティとして、女性の「上品さ」と結びつきの強い「丁寧な」ことば遣い—これは男女を問わない、すなわち「敬語」使用の印象そのものである—を選択することがあるということである。

2.2 「女ことば」の「丁寧さ」と「弱者のことば」

上記の調査結果に見られるような傾向は、敬語、そして日本語だけではなく多くの言語においても見られ、「丁寧さ」と「女ことば」とは密接な関係があるといわれている。この「丁寧さ」を特徴づけるものとして、レイコフ（1985）は英語を例にあげながら「断定を避けること」「付加疑問の多用」「垣根表現の多用」「文法的に正しい言葉の使用」「最高敬体の使用」（レイコフ 1985：104-108）などをあげている。「断定を避けること」「付加疑問の多用」「垣根表現の多用」は、自分の主張を控えることで相手の主張を優先させることにつながり、発話内効力を調整することによる「丁寧さ」の表現方法といえるだろう。これに対して「文法的に正しい言葉の使用」は、規格・基準という「正しさ」からの逸脱による「乱暴さ」を避けることによる「丁寧さ」の表現方法であり、「最高敬体」の使用とも関連する。これらの特徴を日本語に当

ではめて考えてみると、「男ことば」ならば「そうだよ」と断定の助動詞「だ」を使用して話すところを、「女ことば」ならば「そうよ」のように、「だ」が脱落する傾向にあること、また「男ことば」ならば「すげえ (sugee)」と、二重母音の長音化がなされるところを、「女ことば」ならば「すごい (sugoi)」と正確に発音することが求められていることなどがあげられるだろう。

こうしたレイコフのあげた「女ことば」の特徴は、鶴田 (2003) のいう言語における「ポライトネス」を表す2つの領域、すなわち「命令」の発話内行為をあたかも「依頼」のように発話するなど、発話内効力の調整によって配慮を表すような「発話内効力管理領域」と、「言う」を「おっしゃる」に変えるように主に語彙レベルで配慮の度合いを調整する「スタイル管理領域」の2つに該当するといえよう。

上記のような「丁寧さ」の特徴がなぜ「女ことば」にみられるのだろうか。この問題については、従来から二つの見方がなされてきた。第一の見方は、レイコフに代表されるように、「女ことば」は「弱者」のことばであるからというものである。女性は男性よりも社会的立場が弱いため、男性を優先させて一步引くような「女ことば」を話さざるを得ないというのである。そして、そのように「丁寧に」話すことそのものが規範となり、その規範が社会的立場を固定化させる要因として機能し、その結果さらに規範が強化され、社会の中で女性が生きていくために、女性は意識的にも無意識的にも「女ことば」を話さざるを得なくなっていくという、一種の「強制力」が働いているというものである。そして「規範」は「正しさ」との関連が密接であるため、ここから「女ことば」の「正確性」の特徴が現れたとしても不思議はないだろう。

この言語運用の「規範」性が女性に偏って求められてきたこと、そして女性自身がその規範を強く受け入れてきたことは、佐竹 (2005) の研究からも明らかである。佐竹は、国立国語研究所の「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」を対象に、「女ことば」「男ことば」の規範に関する戦後の新聞記事の言説を分析した。その結果、女性（とりわけ若い女性）のことば遣いが乱暴になってきていること、すなわち「女ことば」の乱れに対する非難が、言説内容の中心であることが明らかになったという。さらに、「女ことば」の乱れの責任は、なぜか女性教師や、女性政治家、そして母親など「社会的地位の高い」女性に転嫁されてきたことを指摘している。佐竹はその例として、「おかあさんが正しい、きれいなことばを使えば、子どもも正しい、きれいなことばを話す(1964. 4. 8 内部 朝日)」や、女性教師が「男ことば」を使うことに対して、「女の子が男言葉を使うのはここにも一因があるように思う(1989. 4. 17 投書 読売)」などをあげている。また、ラジオやテレビなどに登場する女性アナウンサーや大学教授、評論家などの「男ことば」も非難の対象になっていたという。このような風潮からは、社会的地位の高い女性の「ことば遣い」を非難することで、暗に「男性を優先させて控えめに」という社会的規範を再認識させようという力が働いていたことがうかがい知れよう。そして、そのような力はその規範を受け入れている女性によっても呈示されていた。佐竹は、一人の女性国会議員に対して、以下のような投書があったことを指摘している。

私はある私立女子高校の家庭科を担当している者です。(中略)聞くに耐えない暴言、乱暴など男の方だけの専用物のはずのものが、婦人代議士の間でも行われたのを聞いて、何ともいえない気持になりました。『ブラウスがこんなになってしまたやないか。自由党のヤツら、片っぱしからたたきめしタル』と髪をふりみだし、ズタズタのブラウスを指さしているあなたの写真を新聞でみたとき私は思わず口走ってしまいました。『まあ、恥さらしなことを-』/大石ヨシエ様/日本がデモクラシーとなり、男女同権の世の中になったとしても、男には男の、女には女の本能と分別があるのではございませんでしょうか。(中略)『女は女らしく』の日本古来の伝統に関心をお持ち下さいませ。(1954. 9. 9 多々良きょう 東京)

戦前から女性の「ことばの乱れ」に対する非難は存在していたが、戦後は女性の社会進出が進むにつれ

て、上記に引用したような批判は規範違反への非難という形を借りた、社会変革そのものへの拒否反応、あるいは抵抗の側面も併せ持っているといえよう。佐竹によれば、近年はこの「規範」に対する疑問も新聞における言説には表れてきているとし、現在は「聞くに堪えない暴言、乱暴など」は「男の方だけの専用物」であるという考え方にあからさまな共感を示す人は少ないという。しかしながら、男児の乱暴なことは遣いが諦念気味に、あるいは寛容に扱われるのに対し、女兒の乱暴なことは遣いに対しては修正しようとする力が周囲の大人に働いていることは、令和の現在においても確かであろう。また、先の大学生の敬語に関する意識調査でも、敬語スキルのない社会人女性に対する印象として「下品」を選択した学生が男女合わせて80名おり、同じ条件の社会人男性に対する印象として「下品」を選んだ学生（41名）のおよそ2倍いることが、規範の逸脱に対する“社会的制裁”の偏りとなって表れていることが確認できよう。

この「丁寧さ」は、「上品さ」という印象、あるいは価値観へと姿を変えて、今でも女性の言動を意識的・無意識的に方向づける力となっているのである。

2.3 「丁寧さ」を通じた社会的アイデンティティの呈示

このレイコフに代表される見方に対し、井出（1991）は女性が男性よりも「丁寧」に話すこと、また「女ことば」を用いることは、女性の「弱者」という性質ゆえではなく、自らの選択によって「女性」という社会的アイデンティティを呈示しているためであるという指摘をした。井出（2006）は日本語の敬語についても、Brown&Levinson（1978）のポライトネス理論のようなストラテジー選択としてよりも、場面によって言うべき形式が決まっている場合が多いという「わきまえ」理論を展開して、欧米の言語理論の安易な一般化に疑問を呈している。井出の女性による社会的アイデンティティ呈示のための「丁寧さ」も、「わきまえ」理論も、おそらくアジアの経済及び文化興隆が進む中で、従来からある欧米によって提示された理論の安易な一般化への疑念と、自らの文化への矜持が根底にあったものと考えられる。

一方で、日本をはじめとした欧米以外の国々においても、男女の力関係に差があったことは否めず、その事実について言語の観点から批判を加えることがなかった言説に対しては、「差別撤廃のための変革にしっかりとつながる研究を積み重ねている（れいのるず2004：8）」というアメリカのジェンダーと言語の研究と比して、批判があるのも事実であろう。

メイナード（1997）は、アメリカ英語を例にして、「女ことば」が社会的に女性を束縛するものであるという時代は存在したが、90年代には一つのスタイルとして選択されていることを指摘している。また水本（2015）は、日本においても、「わ」「よ」「かしら」などの「女ことば」とされる文末詞は実際の場面ではほとんど使われなくなり、男女ともに同じ言葉を使う傾向があることを指摘している。さらに中村（2021）は、そもそも「日本の伝統」であるとする「女ことば」自体が作られたフィクションであり、対人関係の中でその都度呈示される社会的アイデンティティは異なり、「女ことば」は他のことば遣い同様、コミュニケーションの中でおこる絶え間ないアイデンティティ交換のための表現方法の一つであるとしている。中村によれば、「わ」「よ」「かしら」などの現代「女ことば」は明治の女学生言葉というルーツを持つ新しいものであり、昭和の戦争中に、「日本語」の「価値」「優位性」を示すために突如として出現したイデオロギーに過ぎないという。こうした中村の指摘は、従来の「女ことば」の定義のうちに見られた「伝統」という強い拘束性の解体、あるいは相対化を意味しているといえよう。

この言葉の持つフィクション性に注目して、たとえば「老人らしい」ことば遣いや、「お嬢様らしい」ことば遣いなど、あることば遣いを聞くとそれを話す人の社会的・文化的属性を思い浮かべることができるようなことば遣いを「役割語」と呼んだのが、金水（2003）である。また、定延（2020）は金水の「役割語」と相通じる概念として、「キャラ語」によるコミュニケーション論を展開している。定延（2011、2020）は

「格」を「経験や立場」、「品」を「丁寧さ」としたうえで、「《男》は《女》より格が上、《女》は《男》より品が上（定延 2011：170）」のように発話させると、その発話がより「男らしく」あるいは「女らしく」聞こえるとした。定延の「《男》は《女》より格が上、《女》は《男》より品が上」をポライトネス理論から検証して、金水（2023）は、アニメキャラクターでは、女性も権力者になると男性的な言葉（「命令形」「～ぞ」など）を使うようになる現象を「権力による性差の中和」と呼んだ。すなわち、この「性差の中和」は言葉に限定していえば「男ことば」の使用を基本とするのである。しかしながら、「格」を「経験や立場」と定義していることから、定延や金水の研究結果からは、「格」の高い男性がいわゆるバンカラな（乱暴、あるいは下品）なことば遣いをするなどの行動が、「男らしい（スバラシイ）」という評価につながりやすいこと、すなわちこれまで流布していたステレオタイプの追認になるのではないかという危険が伴う。逆に言えば「格」の低い女性でも「品」があれば、「女性らしい（スバラシイ）」という評価を追認する危険性があるといえよう。このような女性はシンデレラのようにおとぎ話の中によく出てきて、長年、ある意味で理想化され、その物語の展開から女性の「夢」として共有されてきた女性の姿（キャラ）でもある。

「お嬢様」「侍」などの具体的な「キャラ」の設定とそれを強化させる「ことば遣い」は、物語の展開・構成や、それを分析する上で欠かせないものであるのに対し、そのような具体的な「キャラ」の範疇を超えて、「女性」「男性」の「らしさ」の概念設定をすることは、物語の中で表れる「女らしさ」「男らしさ」が実際に生きている人間に「規範」となって圧力をかけてくる危険性も孕んでいるといえよう。すなわち「女」という「キャラ」「役割」、「男」という「キャラ」「役割」という概念呈示をすることは、物語における「役割語」の範疇を超えて、ことばにおける性別規範の拘束力強化の機能を持つともいえるのである。

例えば、先の佐竹が取り上げた事例を見ても、「格」があると考えてもよい政治家や教師などの立場の女性たちのことば遣いの評価には、金水のいう「権力による性差の中和」が働かず、発言の趣旨そのものよりも「言い方が悪い」と叩かれる現実が根強くあることは確かである（アニメや漫画の中ではこのようなことは起こりにくく、その人物の「キャラ」として受け入れられている）。これは現実社会においては、「格」の高い女性」という「キャラ」「役割」よりも、その上の上位カテゴリーである「女性」の「役割」「キャラ」のもつ「イメージ」のほうが優位であることを意味している。このことは、「アニメや漫画」の中の「キャラ」「役割」が受け入れられる土壌（フィクション）としての物語と現実とは異なることを示しており、現実では自分で呈示した「キャラ」「役割」を受け入れてもらえないことも多々あり、また他者から自分の望まない「キャラ」を押し付けられることもあるのである。これは、「役割語」が示す物語の中の「役割」や「キャラ」が個性や職業、そして「性別」などの個人的な属性に基づく「キャラクター像」を明確にするためのものであるのに対し、現実に生きる人間は個人的な属性の呈示の他に、社会的・文化的につくられた属性、特に「ジェンダー」からの影響を直に受けるという重層的な関係にあるからであろう。これに類する例は、「役割語」を学んだ日本語学習者が実際にそれを使い、問題を引き起こすということがあげられる（宿利 2018）。

以上のように、「女ことば」を女性自身による社会的アイデンティティ選択の結果、あるいは対象としてとらえる見方は、レイコフの「弱者のことば」と比べて、女性の主体性を強調した捉え方である。しかも、その社会的アイデンティティも女性個人のアイデンティティの中心を占めるという捉え方からコミュニケーション場面に即した表現の一つに過ぎないという捉え方まで、その幅も広く、ひとくくりにはできないだろう。この捉え方の背景には女性の様々な分野への進出や活動があるといえよう。

2.4. レイコフの展望

現在の日本の多くの女性たちは、以上の「女ことば」をめぐる見方に象徴的に表されている状況の交差の中に立たされているように思われる。すなわち、一方では「弱者」、他方では主体性の獲得やその発揮の交差する地点である。もちろん、この交差は女性と言っても年齢層や、生い立ち、現在の家族、職業、地域での生活状況の違いによって、多様な現れ方をしているだろう。しかしながら、しばしば使われている、曖昧で、とらえどころのない「自分らしさ」という言葉もこうした交差が生み出したものと考えられよう。

「自分らしさ」、言い換えれば、自己呈示という欲求から「女ことば」をとらえ直すとき、「女ことば」を「弱者のことば」と捉えたレイコフの次の展望は示唆に富むと思われる。

れいのるず (1985) によれば、レイコフはやや古典的な男性像ではあるが、「風と共に去りぬ」のレッドバトラー役で知られるクラーク・ゲーブルの話し方を「男のスタイル」、マリリン・モンローの話し方を「女のスタイル」の典型例とした上で、このように話す人は実際にはあまりおらず、大抵この両極の間のどこかに（女性ならばモンローより、男性ならばゲーブルより）位置しているという。そして、「女のスタイル」「男のスタイル」といった、互いのスタイルの選択を拘束しあうことをやめて、男でも女でも自由に状況に適したスタイルの選択が可能な柔軟性のある社会の実現（れいのるず 1985 : 200）を考えていたという。すなわち、レイコフも社会的アイデンティティとしてではなく、自己呈示としての「丁寧さ」を認めており、それが「男ことば」「女ことば」といった枠組みでくられることなく、一人の「人間」として表現でき、評価されるような状態を理想としていたと考えられるのである。

レイコフの考えを非現実的と一概に否定しないで、こうした観点から言語、とくに「女ことば」の特徴とされるものについても検証する必要があるのではないだろうか。ここでは「わ」「よ」「かしら」などの特定の文末詞ではなく、男女共通の言葉の中から、女性の方が男性よりもよく使う傾向にある言語形式を「女ことば」ととらえて、以下では、その検証を試みることにしたい。

3. 「女ことば」の検証

3.1 発話内効力の調整にみられる「女ことば」の特徴

先に述べたように、「女ことば」の特徴は、「命令」をあたかも「依頼」であるかのように、発話内効力を調整して表される発話内効力管理領域と、敬体の使用などによって表されるスタイル管理領域の2つに分けて考えられる。このうち、発話内効力管理領域にみられる「女ことば」の特徴は、「断定を避ける」「付加疑問文」を使うなどがあげられているが、これらの特徴はそもそも「女性」との関連が本当にあったのであろうか。村松 (2019 : 39) は、「断定調を避ける話し方」は、日本語の場合、男女を問わず多く用いられており、これは日本語の特徴であるという。ただし、女性上位者は下位者に対しても直接的な表現をとらない傾向にあるという。すなわち、女性は「弱者」であるがゆえに、すなわちパワーバランスを意識するがゆえに「断定調を避ける」話し方をするわけではない。それに対して、男性は下位者にたいしては直接的な表現を用いやすいと村松は指摘しており、男性が「強者」「弱者」というパワーバランスの論理で発話内効力の調整を行う傾向にあり、「強者」の立場に立った男性が「断定調を避ける」という日本語の特徴から逸脱していることを指摘している。すなわち、「表現使用」そのものに男女差が現れているのではなく、「表現選択」における論理が男女で異なるということになる。村松の研究は、本人も述べているように「男は<地位>で話す、女は<和合>で話す（タネン 1992 : 32）」という特徴と合致する結果になったといえ、こうした特徴は日本語を運用する男性と女性の性差に基づくと考えられる必要があるだろう。

日本語の運用について、横倉 (2016) は、東京・横浜在住勤務の日本語母語話者 130 名 (20 代から 60 代

の各世代の男女それぞれ13名ずつ)を対象とし、上司と部下という人間関係1と、友人同士という人間関係2において、R値(ある文化における行為の負荷度)の異なる指示・命令の遂行場面で、どのように命令するのか、自由回答方式で得た調査結果の分析を行った。そして、そこで見られる言語形式の組み合わせについて、①どこまで文として完全に事態を言語で表しているのかという事態化程度(「言い切り」「言い差し」「疑問形」「疑問(音)」「命令形」「て形止め)、②ある発話内行為をどのような行為として表すのかという行為の種類(「指示・命令」「依頼」「許可要求」「質問」「陳述」「発話によって促される行為を聞き手が行うという行為全般」「その他)、③ある発話内行為がどのような人間関係において行われるのかを表す関係性(「敬体」「授受形式)、④ある発話内行為がどのような状況で起こっているのかを表す行為が起こる環境(「過去と現在」「肯定と否定」「事実と可能」「現実と架空)、の4つの観点から考察した。その結果として、以下3点を指摘している。

- (1) R値が上昇すると、人間関係を問わず、「指示・命令」という発話内行為は字義通りに表現されず、「依頼」や「質問」の形式で表現される傾向にある。
- (2) しかしながら、「依頼」や「質問」のように表現された発話内行為「指示・命令」の実行性を保証するために、言いさし・テ形止め・上昇イントネーションによる疑問など不完全な形式ではなく、言いきり、命令形など完全な言語形式を使用することで発話内効力の解釈を限定し、直接的に表現する。
- (3) R値が高く、しかも「指示・命令」という聞き手にとって二重の意味で負担の重い発話内行為を、当事者間の近い関係を強調することで遂行しようとする。(横倉 2019: 1-2)

そして、上記の日本語母語話者全体の発話傾向の特徴を踏まえうえて、横倉(2019)は、さらにその発話傾向の男女差について分析を行った結果、以下のことを明らかにした。

(1) の点について、R値の上昇に伴い、「指示・命令」という発話内行為が「依頼(例: ~テモラエマセンカ)」「質問(例: ~デキマスカ)」のように表現される傾向については、男性が「指示・命令」~「依頼」よりの行為を選択しているのに対し、女性は「依頼」~「質問」よりの行為を選択している点が異なる。「指示・命令」を字義どおりに表す表現は「~シロ」が基本であるが、敬体と共に使用されることが多く、この直接表現が用いられる例は「~テクダサイ」のような授受形式を含むものとなる。授受形式を組み込んだ「~テクダサイ」は「指示・命令」といっても、発話によって促される行為をするという「負担」が聞き手にあり、それによって得る「利益」は話し手にあることを表示するので、話し手と聞き手間の「負担」と「利益」の構造は、「依頼」寄りに調整されている。また、女性が多く使用する「質問(~デキマスカ)」の「負担」と「利益」の構造は「依頼」と同じであるが、授受形式によってやりとりする対象が「依頼」が行為であるのに対し、「質問」が情報であるという点で異なる。もちろん、提供する情報の中身によって具体的な負担の軽重は異なるが、聞き手に「行為」をすることを求める「依頼」と、「情報」を求める「質問」とでは、「質問」のほうが聞き手に対する負担が軽い。すなわち、男性が「行為」のやりとりとして聞き手に働きかける行為の種類を選択するのに対して、女性は「行為」のやりとりから「情報」のやりとりへとやりとりの対象を変質させ、聞き手の負担をより軽く見せる表現を選択していることが指摘できるのである。聞き手の負担を少なく見せるという表現上の工夫は、リーチ(1989)の「丁寧さの原理」に則ったものであり、ポライトネスの原則を如実に表すものである。この点は、多くの研究が指摘する女性の方が「丁寧に」話すという結果と一致する。

(2) については、友人関係ではR値が高くなると、男女ともに完全な言語形式の使用率が上がる点では同じであるものの、女性の完全な言語形式使用率は5割弱であり、男性が6割を超えるのとは異なる。ま

た、表現の直接性/間接性に帰結する行為が行われる環境についての言語形式選択については、男女ともに直接表現を使用することで発話内行為の実行性を高めようとする傾向があるが、女性の方がR値に連動して間接表現を使用している傾向がみられる。間接表現の使用は、「丁寧さ」を表示することになるので、このことから、女性の方が「丁寧」に話しているという結果と一致するが、別の観点から見れば、男性の表現よりも女性の表現の方がバラエティに富んでいるということになるだろう。

(3)の点については、「指示・命令」という、発話によって促される行為をするかどうかの決定権を聞き手が持たない、聞き手にとって負担の重い発話内行為をどのような関係性の中で行うのかという関係の表示方法に関する男女差である。職場の人間関係では、R値（ある文化におけるある行為の負荷度）によらず、男性は敬体不使用と授受形式使用で近い距離を表すことが確立していることが特徴として指摘できる。敬体不使用は話し手と聞き手の間に力関係があることも表示できる一方で、「近しい」関係であることも表示できるからである。

また、授受形式は、贈与交換を関係の基底に持つ「内集団関係」を表示できる。すなわち、男性の場合、上司と部下という仕事上の関係において「近しい」、「内集団関係」を強調することが表現選択の在り方として確立していることを示している。これに対して、女性はR値が上昇すると、敬体不使用の傾向はみられるものの、授受形式による「内集団関係」表示は50%台で変化しない。すなわち、表現選択の上からは、職場において「内集団関係」を表示しない女性が半数程度いる。言い換えれば「職場」における「自己」を「内集団」の一員として見ていない女性が少なからずいるということである。「授受形式」の使用は日本語の場合、「依頼」表現では「～シテモラエマセンカ」のように組み込まれているため、先に述べた女性の「質問（～デキマスカ）」選択の高さは、内集団関係表示が組み込まれた「依頼」表現を避けた結果と考えることもできるだろう。すなわち、女性は聞き手の負担を軽くするために、言い換えれば、より「丁寧に」話すために「質問」形式を使うのではなく、聞き手との関係性を反映したうえで、「内集団関係」表示を選ばなかった結果、「質問」形式を多く使うという可能性である。

また、友人関係では、男性は、R値によらず授受形式による「内集団関係」表示が確立しており、その上でR値が上昇すると、男性は敬体を使用し「丁寧な」言葉づかいをする傾向にあると指摘している。すなわち、男性の場合、「自己」を「内集団」の一員であることを表示しつつも、R値の重みを敬体使用によって表しているのだと考えられる。一方、女性は敬体不使用と授受形式の使用による内集団関係表示が確立しており、R値の高低に表現選択の影響は受けない。すなわち、女性は対等を基調とする関係においては、「自己」を「内集団」の一員として「近しい」存在としてみなしている、あるいは少なくともそう表示しているということになり、「職場」とは明らかに異なる関係認識、あるいは少なくとも表示をしていることになる。

横倉（2019）からは、R値が上昇するに伴って、男女とも人間関係の種類を問わず、聞き手の負担を軽減すると同時に、その実行性を保証する完全な言語形式を選択していることがわかる。このような同一の特徴を持ちながらも、詳細を見ると、男性と比較して女性の方が、関係性表示や負担軽減の表現が多様であるという使用表現の多様性が指摘できるのである。

3.2 「女ことば」にみられる言語形式選択基準 一個人と集団の関係性一

以上の研究から見ると、女性はパワーバランスを重視した言語形式選択よりも、職場関係と友人関係など、人間関係そのものの質的相違を重視して表現を使い分ける傾向にあることは明らかであろう。また、女性の表現方法の方が男性と比べて多様性に富んでいることも明らかであろう。このことは、男性の表現が女性と比べると画一的であることを示しており、松村やタネンのいうように、発話をする際の言語形式

の選択基準が男女で異なることを示しているのではないだろうか。この点について横倉（2022）は分析を進め、以下の点を指摘した（横倉 2022 : 9-10）。

まず、男性は、職場においても、一時的とはいえ上下関係が生じて変化した友人関係においても、ほぼ一貫した配慮のための言語形式の選択・使用がなされており、「指示・命令」の場合は特に、上位者としての自己の優位性が選択基準として存在している点である。そしてこの選択基準は、近代以降、男性が長時間身を置く「職場」の特徴から影響を受けている可能性を指摘している。すなわち、職場では、近代社会の特徴のひとつである、業績主義（能力主義）という価値基準によって個人が評価されることから、この評価のもとになる自己の役割・タスクの達成が目的となり、人間関係・集団はその手段とみなされやすくなり、こうした自己と集団との関係性の捉え方が男性の関係認識の基底にある可能性である。そして、この価値基準は男性の場合、上位者にも下位者にも共有されているため、その面では集団の構成員間の社会的・心理的距離は近くなる。また、男性がほぼ一貫した言語形式を選択するのは、職場における「指示・命令」の表現方法がコード化して男性の中で共有され、一種の慣習のようなものになっている可能性も指摘している。

これに対して、女性の場合、個人単位のタスク・役割よりも所属する集団や人間関係の関係性の維持に主たる関心・目的があり、配慮のための言語形式選択の基準もそこにあり、その根底には「他者とともにある自己（坂田 2014）」という自己と集団との関係性の捉え方が存在していることを指摘している。また、女性が多様な表現を使用する傾向の裏には、女性の場合、「指示・命令」をする立場についてことができなく、あるいはそのロールモデルも身近には少ない、すなわち男性のようなコード化された表現が確立していないという現実から、自分なりにイメージをしながらの、試行錯誤の結果であるという可能性も指摘されている。

男性がパワーバランスを重視して発話内効力の調整を行っていることや、画一的な表現を使いやすいことは、上記した通りであるが、その一方で変化も生じはじめている点は注意すべきであろう。そのことは、「敬語」研究の動向からも見てとれる。

「敬語」はこれまで主に「上下関係」に注目して研究がなされてきた。これは「身分」と「職業」の一致が見られる状況が歴史的に続いてきたこと、そして家父長制により「家庭」の中まで「上下関係」のルールが浸透し、特に明治以降は法律という形で社会を統制してきた背景とは無縁ではないだろう。また、戦前は家族の構成員に対する敬称の使い方まで教科書に記載され、言語生活における統一基準を示していたことから、「敬語研究」そのものも、この傾向を強化する一役を担っていたといえよう。

しかしながら戦後は、「敬語」の使用は「上下関係」から「親疎関係」など横のつながりのマネジメントにその使用のあり方をシフトしてきたといえよう（2007年 「敬語の指針」文化審議会）。すなわち、「敬語研究」の在り方も、人間関係のマネジメントを「上下関係」一辺倒から変化させる方向を指示しているともいえるのである。「敬語」はスタイル管理領域を代表する言葉であり「上下関係」をシンボリックに表す言葉である。それだけに、この「敬語」使用にみられる変化は大きな意味を持つだろう。実際、多くの職場では「です・ます」という敬語の丁寧語は上位者・下位者、男性・女性間で共通して使われており、伝統的な敬語の範疇を超えて用いられているからである。社会の在り様が「上下関係」一辺倒から多様化してくるに従い、配慮表現における言語形式選択の基準も変化してくることが考えられる。「社会の在り方」は「ことばの使用」に影響を与えるが、「ことばの使用」もまた「社会の在り方」に影響を与えるのである。

これまで、女性が男性と同じようなことば遣いをするに対する批判がなされ、その理由として「女性の品位を傷つけることになるから」、あるいは「伝統文化に反するから」のような理由があげられてきた。しかし、これはパワーバランスに敏感な男性にとっては、下位者と思っていた女性が自分と同じく話すこ

とを単に「フェイス侵害行為」だと思っていただけなのかもしれない。これに対して、当の女性は「上位者」「下位者」の別なく、単にポジティブストラテジーを使っていただけなのかもしれず、「フェイスリスク」の見積もりにおける尺度の違いのあらわれだったとも考えられる。

以上のように男性がパワーバランスを意識して発話内効力の調整を行う傾向にあるのだとすれば、男女のパワーバランスが均衡するにしたがって、発話内効力の調整にみられるポライトネスには、男女差が見られにくくなっていくと考えられる。この傾向はすでに見られているが、その一方でこうした傾向の内に孕まれている問題を直視する必要もあると思われる。すなわち、男性とのパワーバランスの均衡がみられるようになるという事態が、女性の社会進出や地位の向上がさらに進むという女性の上昇方向の力によってもたらされるものというよりも、男性の中で、これまでであれば当然得られていたであろう社会的立場から脱落し、「弱者」となっていくスピードが加速するという下降方向の力によってもたらされる可能性のほうが大きいと考えられる点である。男性が「パワー」を意識しやすいう傾向にあるとするならば、この男性「弱者」の増殖によるパワーバランスの均衡は、言語生活をおくる上で「下位者」としての自己の確認を意識的にも無意識的にも強いられることになるので、単なる言語形式選択を超えて、社会的怨嗟を招くことになりかねないであろう。これは、「上位者」「下位者」の違いで表現形式を選択しない傾向にある女性が、社会的な「弱者」に位置づけられている場合とは、質的に異なる社会の深層心理の変化といえよう。そして、こうした社会的怨嗟のはけ口としての一つとして、伝統的な「女らしさ」、すなわち、「柔らかさ」や「上品さ」を表す「女ことば」の順守やそれからの逸脱を批判する言説もまた生じてくることになるとと思われる。「女ことば」をめぐる今日の社会的・文化的状況の特徴は「強者」である男性ばかりでなく、「弱者」となった男性からも問題性を帯びたものとして見られる点にあると思われる。

4. 「女ことば」と自己呈示としての「丁寧さ」

4.1 コミュニケーションにおける自己呈示と他者からの承認の問題

以上、従来「弱者のことば」とされてきた「女ことば」の特徴について、発話内効力管理領域を中心に検証してきたが、女性ばかりでなく男性にも求められ必要とされる「自己呈示としての丁寧さ」には、こうした特徴はどのような役割・意味を持つことができるのかについて、考察を進めることにしたい。

はじめに、「自己呈示」という言葉の最小限の注釈を加えておきたい。「自己呈示」は字義通りには「自己」をさらけ出す、開示することを意味するが、他者とのコミュニケーションにおける「自己呈示」には、固有の問題が内包されており、この問題を抜きにして「自己呈示」を考察できない点についてである。

本稿の冒頭でもふれたが、他者とのコミュニケーションにおいて呈示する「自己」とは、コミュニケーション相手にうつる「自己」、いい意味でも悪い意味でも他者から期待された「自己」を含まざるを得ないだろう。すなわち、「社会的に類型化された者」としての「自己」である。この「社会的な類型」は、他者との関係性や、時と場面に応じて上司・部下、教師や学生、友人・家族、さらには女性・男性などとしての「自己」となる。そして、この「自己」には期待や社会的規範に沿った言動が求められ、それからの逸脱は不機嫌な言動、嫌み、陰口、仲間外れ、叱責などの制裁を伴う。こうした言動を含めて、日本では「社長らしさ」や「学生らしさ」「男らしさ」「女らしさ」というように、「～らしさ」という言葉が「社会的類型」としての「自己」に使われてきたのである。また、その逸脱や制裁を示す言葉として「世間の目を気にする」や「世間体を気にする」という言葉が使われてきた。

しかしながら、こうした「社会的類型」としての「自己」に対して、違和感や居心地の悪さ、抵抗など、そうした「自己」に収まり切れない「自己」を感じる場合もある。そうした「自己」を「自分らしさ」とい

う言葉で表現することもできるし、実際、この言葉は広く流布している。こうした「自分らしさ」が個人的な癖や習慣の場合、他者とのコミュニケーションや「～らしさ」の中で許容されることも多い。この「～らしさ」の中にはそうした柔軟性も備えているのである。しかしながら、この許容を大きく超える場合、例えば校則の変更を求める言動をする「自己」、従順で控えめな「女らしさ」を超えて物を言う「自己」など、従来の「学生らしさ」「女らしさ」を超えた「自己」を呈示する場合、何らかの社会的制裁が加えられる可能性がある。そしてその場合、呈示された問題がまともに取り扱われずに、もっぱら「～らしさ」からの逸脱が問題とされることが多い。このことは、「自己呈示」といっても、個人的な癖や習性を示す場合と後者の場合とを区別する必要性を示しているといえよう。特に、後者の場合には他者からの承認・認知に関わる問題が前面に登場してくることを意味するだろう。他者とのコミュニケーションにおける「自己呈示」には、こうした固有の問題が内包されており、コミュニケーションに参加する人間はこの問題から逃れることはできない。多様性の許容によるその解消というだけでは、かえってこの問題を見逃してしまうことになるだろう。

4.2 自己呈示と「女ことば」の可能性

本稿でいう「自己呈示」は「社会的に類型化された者」としての「自己」に対して違和感や抵抗を感じる「自己」の提示に限定して使うことにするが、「自分らしさ」という言葉の中にはこうした「自己」が多分に含まれているからである。上記したように、コミュニケーションにおいて、この「自己」あるいは「自己イメージ」の呈示は、コミュニケーション相手・他者からの承認が不可欠でもあり、「自分らしさ」もまた他者、社会的承認を必要とする。言い換えれば、この場合でも、また先に見た問題がベクトルを逆にして「自己」「自己イメージ」を呈示する者に生じてくることになるのである。

「自己呈示」する者はこの問題にどのように対応したらよいのか。その対応の一つとして、言語上の対応を考えると、「丁寧な」自己呈示の必要性が考えられる。「丁寧な」というと先に見たように「女らしさ」「女ことば」という連想が生じがちであるが、それは、いわゆる「女らしさ」を発揮したり、「女ことば」を連発したりすればよいという意味ではない。ここでいう「丁寧さ」とは、他者の人格を尊重し、そのフェイス侵害を回避するような言語運用を指す。火事を見た人が「火事だ」「火事よ」と言ったからといって、その事態を前にして、その区別を誰が問題にするだろうか。これと同様に、「丁寧な」言語運用をしている男性も少なからずいるのである。ただ、上記で検証したように、「丁寧な」言語運用は「女ことば」に特徴的に現れており、この点から「女ことば」のうちに含まれたこうした要素に注目してよいと思われる。

すでに検討してきたように、「女ことば」の発話内効力管理領域における特徴は集約的に言えば「多様な表現」にあり、その中でも特に、次の二点は「丁寧な」言語運用上、重視してよいと考える。第一は、「依頼」や「質問」の発話内行為が男性よりも女性に多くみられる点である。もちろん、「指示・命令」を「依頼」に変えて発話する男性も少なくない。というより、むしろこの発話内効力の調整は上位者である男性でも、通常よく行っているといえよう。こうした調整は聞き手の心理的負担をより軽くする効果を持ち、またそれが目的として行われるからである。したがって、こうした言語運用は「女ことば」に、より特徴的に現れているに過ぎないともいえよう。第二に男性では「言い切り」の使用が多いのに対して、女性では「疑問形」を使用するのが多い点である。この「疑問形」の多用は、決定権を相手に委ねるという言語上の特徴を持ち、聞き手の優位性を示す。しかしながら、「この疑問形」の中には同時に話し手の主張が織り込まれており、その主張自体は曖昧であったりするわけではない。すなわち、聞き手に解釈をゆだねるのではなく、話し手責任、いいかえれば「自己」を呈示する者の責任が果たされているのである。したがって「疑問形」は話し手責任を果たしたうえで、その判断、承認の決定を聞き手に委ねる言語構造なのである。

このことは「疑問形」がコミュニケーションを継続させる機能を持つことを意味するだろう。

そして、「女ことば」の発話内効力管理領域にみられるこうした特徴が、言語形式選択の基準となる「他者とともにある自己（坂田 2014）」という自己と他者、あるいは集団との関係性の在り方と結びついている点に注目してよいだろう。この関係性の在り方を近代以前の集団主義と一蹴することもできるだろう。実際、そうした一面があることは否定できない。しかしながら、それで済ますならば、「自己」「自己イメージ」が他者の承認を不可欠とするというコミュニケーション自体の矛盾に満ちた問題に、現実的にも理論的にもアプローチすることはできないであろう。むしろ、こうした関係の在り方のうちにそうした可能性があることを認識する必要があると思われる。

以上の「女ことば」の発話内効力管理領域における特徴、そしてその特徴を示す言語形式選択の基準は、さらにコミュニケーション相手の「フェイス侵害行為」の回避や補償行為にも新しい光を当てることができるのではないだろうか。すなわち、「侵害」の対象である「フェイス」を「社会的フェイス（面子）」だけではなく、一人の人間、一個人の人格としての「侵害」を「回避」する、あるいは補償行為を行うという二段にわたる行為と考えるというものである。コミュニケーション相手と「自己」を互いに「社会的フェイス」として認知することで、コミュニケーションが開始するというのは否定できない。そして、この開始自体が「社会的フェイス」に付きまといている偏見や差別意識によって困難であることも事実としてあるだろう。このことは、何も異文化コミュニケーションに限らず、同一の文化・社会内でのコミュニケーションでも生じているのである。しかしながら、こうした事実は否定できないとしても、一人の人間、一個人の人格の承認欲求という面もまた強く、意識的・無意識的かはともかくとして、それが「自分らしさ」を求める背景となっていると思われる。この欲求は他者からの承認、社会的承認を必要とすることで、自己と他者との関係性の在り方を求めることになると思われる。たとえ、この他者との関係性の在り方が「社会的フェイス」のうちに収まるとしても、そのうちに収まり切れない「自己イメージ」の呈示という重層的コミュニケーションが生まれざるを得ないし、実際に生まれていると考える。この重層的・二段的なコミュニケーションの流れを想定するとき、「女ことば」の特徴とされてきた「丁寧さ」は自己呈示と他者からの承認を連結する役割を果たすと考える。

4.3 スタイルとしての「女ことば」

ところで、これまで日本語における「女ことば」「男ことば」の研究の中で、大きな比重を占めるのは「わ」「よ」「ぜ」などの「文末表現」の研究であり、このスタイル管理領域における「自己呈示」としての「丁寧さ」は、文末表現によって残る可能性がある。発話内効力管理領域とも関連があるが、「いいんだよ」というところを「いいよ」と断定の「だ」を脱落させたものが「女ことば」として言われることがあるが、このような「だ」の脱落はすでに「断定を避ける」などという発話内効力の調整として意識されて選択されているというよりも、一種の文末表現として確立している可能性がある。すなわち、「敬語」でいうならば、「～サセテイタダク」表現が本来有していた「許可をもらう」という意味が薄れ、謙讓語化しているのと同様の傾向である。このような場合、これらの文末表現は、すでに「丁寧さ」が表示されているのかどうかも不明であり、単に「女」という符号を呈示する「役割語」的な意味合いが強いといえる。このことは「役割語」研究においても、主に「わし」「拙者」「わたくし」などの自称詞や、「～じゃ」「でござる」「てよ」などの文末表現の研究が中心に進められていることと一致し、親和性の高いことを示唆している。このような意味で、「女ことば」はメイナード（1997）のいうようなスタイル、つまり個人の選択・趣向の問題として残ることはあるだろう。したがって、それは「上品」などのスタイルを表し、結びつくことばとしての機能を果たすが、個人の選択の領域にとどまると思われる。

5. 結語

広く流布している「自分らしさ」という言葉の背景には、社会的に規定された「自己」（「～らしさ」に対する違和感や居心地の悪さ（「もやもや感」）、さらには拒否の感情や思いがあり、そうした感情や思いが「～らしさ」に縛られない「自己」「自己イメージ」を呈示する欲求を強めていると考えられる。この言葉自体はそうした欲求とは裏腹にあらゆる商品のキャッチコピーとして使われており、消費社会の渦に巻き込まれているという皮肉な現実もあることも事実である。にもかかわらず、この欲求自体は強まり、様々な「～らしさ」の領域で広がっていることも否定できないだろう。

こうした自己呈示の欲求はそれが充足されるためには、他者からの承認、社会的承認が不可欠である。すなわち、他者の存在とその他者からの承認を前提とせざるを得ない。もちろん、この前提なしに、承認させることも可能であり、事実そうした試みの中で人間は生きてもきた。空想の世界、想像の世界である。しかしながら、この空想の世界においてすら、自己呈示の欲求は他者（人間であれ、動物、妖怪、自然物であれ）の存在とその他者からの承認を前提とするだろう。そして、人はこうした承認を得てのびのびと自己を呈示することができ、正気を保ってきたともいえよう。

「自己イメージ」を受け入れ、承認してくれる他者との関係性を抜きにしては自己呈示の欲求は現実的には、充足しない。この関係性を築く上で他者とのコミュニケーションは必要不可欠であるが、なかでも言語を媒介としたコミュニケーションは複雑な心情・感情・思想を表現し、伝えるためには重要な位置を占めるだろう。言語は自己呈示の手段であるとともに、自己呈示そのものでさえあるだろう。同時に、この自己呈示としての言語は他者への配慮をも表現する必要があるだろう。本稿は、この言語による自己呈示と他者への配慮の表現を考える上で、従来「弱者のこことば」とされてきた「女ことば」にみられる「他者とともにある自己」を言語形式の選択基準とし、その他者を尊重する多様な言語表現を通して表れた「丁寧さ」の内にその可能性を検証したものである。この可能性を男女共通の言語的基盤として生かしていくとき、あのレイコフの展望に一步近づくのではないかと思われる。

参考文献

- 1) 井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』大修館書店
- 2) 井出祥子・田村すず子・遠藤織枝 (1991) 「座談会 ことばの研究と女性」『国文学 解釈と鑑賞』56-7
- 3) 内田信子 (1997) 「会話行動にみられる性差」『女性語の世界』井出祥子編、明治書院、74-93
- 4) 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 5) 金水敏 (2023) 「役割語のジェンダーとパワー」『社会言語科学』第26巻1号、37-48.
- 6) ゴッフマン、E (2002) 浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為』〈新訳版〉法政大学出版局
- 7) 坂田桐子 (2014) 「選好や行動の男女差はどのように生じるか - 性別職域分離を説明する社会心理学の視点」『日本労働研究雑誌』No. 648, 94 - 104.
- 8) 佐竹久仁子 (2005) 「女ことば/男ことば規範をめぐる戦後の新聞の言説：国研「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から」『阪大日本語研究』17 111-137
- 9) 定延利之 (2011) 『日本語社会 のぞきキャラくりー顔つき・カラダつき・ことばつきー』三省堂
- 10) 定延利之 (2020) 『コミュニケーションと言語におけるキャラ』三省堂

- 11) 滝浦真人 (2022) 「なぜ敬語は「5 分類」になったのか？」近藤康弘・沢田淳編『敬語の文法と語用論』開拓者、59-89.
- 12) タネン・デボラ (1992) 『わかりあえない理由—男と女が傷つけあわないための口のきき方 10 章—』田丸美寿々訳、講談社
- 13) 鶴田庸子 (2003) 「敬語を使うとどのようなポライトネスが伝わるのか—発話内効力管理領域とポライトネスの違い—」『日本プラグマティクス学界』13 17-38.
- 14) 中村桃子 (2021) 『「自分らしさ」と日本語』ちくまフリマー新書
- 15) Brown & Levinson(1978 (1987)) *Politeness : Some universals in language usage*. Cambridge: New York: Cambridge University Press.
- 16) 松村瑞子 (2019) 「日本人女性の発話におけるアサーティブネス : ノン・アサーティブネスは女性の特徴か、日本人の特徴か?」『言語科学』54, 27-36,
- 17) 水本光美 (2015) 『ジェンダーから見た日本語教科書 日本女性の昨日・今日・明日』大学教育出版
- 18) メイナード・K・泉子 (1997) 「アメリカ英語」『女性語の世界』井出祥子編、明治書院、130-140.
- 19) 宿利由希子 (2018) 「日本語教育とキャラ」224-241. 定延利之 (編)『キャラ概念の広がりと深まりに向けて』三省堂
- 20) 横倉真弥 (2016) 「R 値が及ぼす配慮を目的とした言語形式選択への影響について」『名古屋言語研究』第 10 号, 71 - 84.
- 21) 横倉真弥 (2019) 「配慮のための言語形式選択にみられる男女差について - 指示・命令遂行時を例に - 」『名古屋言語研究』第 13 号, 45-58.
- 22) 横倉真弥 (2022) 「配慮のための言語形式選択基準にみる男女差 —自己と集団の関係性の捉え方を中心に—」『日本語とジェンダー』第 20 号、1-12.
- 23) 横倉真弥 (2024) 「大学生の敬語使用意識における男女差と敬語教育」『日本語とジェンダー』第 22 号、54-56
- 24) れいのるず・あきば・かつえ (1985) 「解説/アメリカにおける言語と性差の研究 —ロビン・レイコフをめぐって—」ロビン・レイコフ『言語と性』有信堂 171-203.
- 25) れいのるず・秋葉・かつえ (2004) 「序論/言語と性差の研究 フェミニズム言語研究の理論構築に向けて」れいのるず秋葉かつえ・永原浩行編『ジェンダーの言語学』明石書店
- 26) リーチ. N・ジェフリー(1987) 『語用論』池上嘉彦・河上誓作訳 紀伊国屋書店
- 27) ロビン・レイコフ (1985/1990) 『言語と性 英語における女の地位』新訂版、かつえ・あきば・れいのるず訳、有信堂